

泉南市文化財調査報告1971-1

日本住宅公団新家団地内

泉南市向井山遺跡発掘調査報告

1972・3

泉南市教育委員会

## はしがき

近年、泉南市にも、周辺地域の開発とともに、各種造成工事の激増の波がおしよせてきています。本教育委員会も、埋蔵文化財の保存と地域開発の波間にあって、文化財の保存を真正面から考えいかなければならない時期にあります。

ここに報告する向井遺跡は、日本住宅公団の泉南新家園地造成に際して、同公団より大阪府教育委員会へ用地内の埋蔵文化財分布調査が依頼されて以後、同府教育委員会によって第一次、第二次試掘調査が実施された結果、弥生式土器、須恵器が出土することがしらるに至りました。

本委員会は、大阪府教育委員会と日本住宅公団と密接な協議を重ねた結果、さきに範囲確認調査した第3号地点のA地区とD地区全域の調査を実施したものであります。なお、遺跡の中心部は、すでに畠地開墾のため破壊され止なく記録にとめなければならない現状でしたが、今後も文化財の保護と活用のため、努力する所存でありますので市民各位の御協力をお願ひいたします。

本書が、各位の郷土に対して、また私たちの先祖が生活した歴史をたどり、認識と理解の資料として、御利用いただければ幸甚であります。

なお、調査にあたって主任として終始事にあたられた奥野義雄氏をはじめ、日本住宅公団など多くの方々の協力があった。ここに記して厚く感謝の意を表したい。

泉南市教育委員会

教育長 山下重雄

## 例　　言

1. 本報告書は、泉南市教育委員会が日本住宅公団から委託を受けて担当実施した、同市新家に所在する日本住宅公団新家団地（仮称）内にある向井山遺跡の昭和46年度発掘調査事業の報告書である。
2. 調査にあたっては、元廣寺仏教民俗資料研究所の奥野義雄氏を調査担当者とし、藤田正篤、中橋政美、樋木利秀（現市職員）諸氏らが補佐した。また、調査期間中、大阪府教育委員会、日本住宅公団および同新家団地工事監督事務所の援助をいただいた。
3. 調査は、昭和47年2月12日より3月31日までの間、本市教育委員会の事業として実施した。
4. 本調査報告書の執筆および図版の作成には、主として調査員の奥野義雄氏があり、松田正昭、宮田均、谷端昭夫諸氏らがこれを補佐した。また、写真撮影には中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調査会の藤原和子氏の協力をえた。
5. 本調査にあたっては、写真・実測図などの記録を作成するとともにカラースライドを作成した。広く利用されることを望む次第である。

## 向井山遺跡発掘調査報告 目 次

はしがき	教 育 長
例 言	
第Ⅰ章遺跡の位置	2
第Ⅱ章調査経過	2
第1次調査	2
第2次調査	3
第3次調査	6
第Ⅲ章遺構	8
第Ⅳ章遺物	10
第Ⅴ章まとめ	12

## 第Ⅰ章 遺跡の位置とその環境

和泉山系の西麓に広がる細長い平野の内、縁につつまれた田園地帯に囲まれた日本住宅公団の新家団地内の向井山遺跡は、泉南市新家町にある。

すなわち、国鉄阪和線の「新家」駅から約500mの地点、つまり、同駅から「和泉砂川」駅の方向へ進み、新家川を横切ってから阪和線の嵩下をくぐり、西南方向にいくと、調査地域へむかう。

今回の調査地域は、従来から島地として使用されていた地域で、現在もなお使用中の島地がある。同地域を、第2次調査時にA・B・C・Dと北方から仮称区分していたが、各地点とも標高20~24mの高さに含まれる。各地区の内、標高24mのB地区が、もっとも高く、他の地区は21乃至22mの高さに位置している。

この向井山遺跡から、西北部 600mの地点に白鳳時代の寺跡として周知の海会寺（現在、一丘神社がある）、東北部 900mの地点に下村古墳が所在する。また、同遺跡の東方1.2kmの地点には、最近大阪府教育委員会が発掘調査を実施した新家古墳群がある。さらにつきこの古墳群の東方には、兎田古墳があり、泉南市の古代史を解くに充分な文化財が散在しているのである（PL・1）。

## 第Ⅱ章 調査経過

第1次調査 昭和46年6月23日、あらたに計画される泉南新家団地について、日本住宅公団より大阪府教育委員会に対して、用地内の埋蔵文化財の分布調査の依頼があった。用地は、泉南市新家325番地をはじめとする31000m<sup>2</sup>で、内に田島・山林などを含むものである。丘陵地を削平し、低地に盛土する計画で、工事は、すでに一部着手されている状況であった。大阪府教育委員会は、本用地内の分布調査を工事関係者の立会いを求めて、昭和46年6月30日に実施した。大阪府教育委員会は、西山要一、藤田正篤両氏に分布調査を依頼し、両氏は同年7月1日に用地内に所在する遺物散布地を大阪府教育委員会に報告した。日本住宅公団との間で協議をもち、一応、第一期工事用地に含まれる第1号、第2号散布地点について、性格をきわめるための試掘が必要との結論を出し、奥野義雄、藤田正篤に試掘調査について依頼があった。

奥野、藤田の両名は、昭和48年7月6日工事関係者の協力をえて

第1号、第2号地点の試掘調査を実施した。なお、試掘調査は、その結果からみて、1日のみで終了するに至った。

試掘調査では、第1号地点である長慶寺の横を通って丘陵にのびる山道と、ほぼ直角になる長慶寺の丘陵を切断した崖下の地域にトレントを設定した。この地域は、ほとんど地山まで削平されていたが、南北に長さ12m、東西に巾1mのトレントを設け、深さ40cmまで掘り下げた。表土層は20cmをはかり、直ちに黄褐色砂質の軟質の地山となっていた。この結果をみて、同トレントの南側、山道と直角に交わる崖下に隣接した地域に新しいトレントを設定した。長さ6m、巾1mをはかり、深さ40cmまで掘り下げたが、さきのトレントと同様の結果であった。したがって、本地点からは、当初予期した遺構、遺物の発見はなく、遺跡は存在しないことを確認した。

その後、第2号地点の試掘調査に移った。第2号地点は第1号地点から北東方向220mはなれた地にあり、丘陵部の全てが削平され、僅かに草木の茂った削平を免がれた地域に東西の長さ7m、南北の巾1mのトレントを設けて、深さ40cmまで掘り下げたが、表土層15cm前後で、直下は黄褐色砂質の地山であった。また、その後このトレントに直交交叉して南北の長さ6m、東西の巾1mのトレントを設定し、試掘を行なったが、同様の所見をえた。したがって、本地点も、遺構・遺物の発見はなく、さきの分布調査の採集に係る遺物との関連は明確にはならなかった。

なお、第3号地点については、後日調査を行なうことになり、第一次調査では、一応第1号、第2号地点の調査にとどまった。

## 第2次調査

昭和46年8月21日から9月4日まで、新家団地造成地内の第3号地区の試掘調査を実施した。この調査は、さきの分布調査の際、採集した各遺物の地点を指標として、北からA・B・C・D地区と称した。A地区は、分布調査でサヌカイト片などを採集した地点で、第3号地区の最北部に位置する。B地区は、分布調査で須恵器片などを採集した地点である。C地区は、分布調査で須恵器片などを採集した地点である。D地区は、分布調査で同じく須恵器片を採集した地点である。A地区は、B地区から23m北方にあり、B・C・D地区はそれぞれ隣接する丘地である（PL1・2）。

**A地区** まず、試掘作業は、雨天の関係上、8月23日、A地区から開始した。A地区に東西長さ16m、南北巾1mのトレントを設定した（以後、A-Iトレントと称する）。設定後、試掘作業を行な

い、深さ50cmまで掘り下げ、トレンチの西側に深さ1mの小坑を設けた。同トレンチの東側の茶褐色粘土層（第2層）中より、弥生式土器片を数点検出した。この状況をみて、同トレンチの中部部に直交するトレンチ南北の長さ15m、東西の巾1mを設定し、遺物包含、範囲確認につとめた。この直交するトレンチの西方で弥生式土器片を、茶褐色粘土層中より発見した。また、同トレンチの東方でも弥生式土器片を検出した。ただ、遺構は発見されなかった。この地点は島地の上段部であり、下段の島地にも遺物分布範囲を確めるために南北の長さ10m、東西の巾1mのトレンチ（以後、A-IIトレンチと称す）を設けて、深さ50cmまで掘り下げたが、表土層下は、直ちに砂礫層となっていた。遺物の包含はなかった。

**B地区** A地区の調査後、B地区の調査にはいった。まず東西の長さ20m、南北の巾1mのトレンチ（以後、B-Iトレンチと称す）を設け、深さ60cmまで掘り下げたが、トレンチの中央、東西側は深さ1mまで掘りさげた。遺物包含層ではなく、表土層下に20cm前後の堆積を示す茶褐色砂質層で、その直下に地山があった。このトレンチを試掘後、同トレンチの中央部に直交するトレンチを加えて試掘を行なった。試掘の結果、さきと同じ様相を呈し、遺構・遺物の検出はなかった。

この結果確認後、このB-Iトレンチの西南方に東西の長さ6m南北の巾1mのトレンチを設定し、試掘を行なった（以後、B-IIトレンチと称する）が、B-Iトレンチと同じ結果をもたらした。

**C地区** その後、B地区に隣接する南部のC地区の調査に移った。C地区は、現在耕作されている地域があるため、島地の上下段の休作地域を選び、トレンチを設定することにした。上段の島地には、南西の長さ10m、南北の巾1mのトレンチを設け、下段の島地には、南北の長さ7m、東西の巾1mのトレンチを設けた（以後、C-IおよびC-IIトレンチと称する）。

まず、C-Iトレンチを深さ50cmまで掘り下げたが、表土層20cmの堆積直下、30cmの茶褐色粘土層があり、その層下は地山であったなお、地山部分の確認のため、同トレンチ内の南・北側および中央部に、長さそれぞれ2mの小坑を穿って、深さ1mまで掘り下げたが、地山層の変化はなかった。また、C-IIトレンチでも、深さ50cmまで掘り下げ、トレンチ内の東・西両側にそれぞれ2mの長さの小坑を穿って、遺物・遺構面の存否を確認した。

これらの試掘結果から、遺物・遺構の存在しないことをたしかめた。この両トレンチの結果を再確認するため、C—Iトレンチの西南方、つまりD地区により近い島地の最上段部の休作地を選定して南北の長さ10m、東西の巾1mのトレンチ（以後、C—Ⅲトレンチと称す）を設定し、試掘を行なった。同トレンチを深さ60cmまで掘り下げていった。この作業の途上、15~20cmの堆積を示す表土層下の茶褐色砂質層中より須恵器の破片を1点検出した。この茶褐色粘土層は60~70cmの堆積を示し、その層下は地山であった。このトレンチの成果をもって一応C地区の調査を終った。

**D地区** D地区的さきの各地区と同様の地形を呈していて、一部分ミカン畑があり、休作地を選ばねばならなかった。したがって休作地で最も広い下段の島地にトレンチを設定した。このトレンチは、南北の長さ25m、東西の巾1mとし、深さ50cmまで掘り下げたが、黄褐色砂質層（第4層）中、つまり表土から深さ40cmの地点で須恵器片以外遺構の存在はなかった。（以後、D—Iトレンチと称す）その後、同トレンチ内の南・北側に長さ3mの小坑を設けて深さ1mまで掘り下げていった。南側の小坑では遺物・遺構の検出はなかったが、北側の小坑では、第層直下で東西に走る暗茶褐色砂質土が堆積する南北の巾70cm前後をはかる溝を検出した。溝はD—Iトレンチの中央から北方、すなわちトレンチ北側から2.5m南方の地点に北肩をあり、北肩から1m南方に南肩がある。この溝状遺構の出土状況を重視して、同地域に二本のトレンチを設定することにした。すなわちこのD—Iトレンチの東方に南北の長さ7m、東西の巾1mのトレンチ（以後、D—IIトレンチと称す）を、またD—Iトレンチの東方に南北の長さ7m、東西の巾1mのトレンチ（以後、D—IIIトレンチ）を設けて、深さそれぞれ50cmまで掘り下げた。これらの試掘の結果、D—Iトレンチ内でさきに検出した東西に走る溝状遺構の一部を確認したが、D—IIIトレンチでは検出できなかった。しかし、D—IIIトレンチでは表土層下に砂礫土が堆積し、D—I、D—Iトレンチ地域とあきらかに地層的に変化していることを認めた。その後、これらのトレンチの設定地域の上段および最上段の島地にもトレンチを設けて、溝状遺構の状況確認することにした。すなわちD地区的上段に南北の長さ10m、東西の巾1mのトレンチ（以後、D—IVトレンチと称す）を、また同地域の西寄りに南北の長さ7m、東西の巾1mのトレンチ（以後、D—Vトレンチ

)を、さらに同地域の上段の島地に南北の長さ7m、東西の巾1mのトレンチを、それぞれ設定し、深さ50cmまで掘り下げた。その結果、D-V, D-VIのトレンチでは遺物、遺構の検出はなく。D-IVトレンチで、トレンチ北側から1.5mの地点で溝の南肩を検出した。北肩は現在島地の陸・排水用の溝にあたり、確認是不可能であった。

### 第3次調査

昭和47年2月12日、日本住宅公団と、発掘調査に際しての話合をもった。すなわち、当日団地用地内の調査現場において、団地内の未買収地域および用水路などに関する注意要項について打合せを行なった。そして、その後、同地区(第3号地区)内の調査を開始した(PL1・2・3)。

まず、調査にあたって、第2次(試掘)調査でD地区と仮称していた地域から始めていくことにして、同地域を、地形的制約から3地区に分けた(PL4)。すなわち、D-I, D-II, D-III地区に区分し、調査地区設定を終った。D-I地区は、第2次調査地のD-I, D-V, D-VIの各トレンチを設けた地域である。D-II地区は、新しく今回の調査で設定したD-I地区の西方にある上段の島地である。また、D-III地区は、第2次調査時のD-IIIトレンチの地域である。

**D地区およびC地区** D各地区的調査地域を設定後、調査はD-III地区から開始した。同地区は南北の長さ8m、東西の巾8mで、面積は64m<sup>2</sup>の範囲で、深さ60cmまで掘り下げていくことにした。表土層を剥り、第2層の黄褐色粘土を削平し、地山層まで掘り下げていったが、遺物包含も遺構の存在もなかった。同地区的層位状況をみると、東西軸の南断面から表土層は15~20cmの堆積を示し、同土直下2~10cmの黄褐色粘土の二次堆積層があり、この層下は地山であることをたしかめ、西から東へ向って地山は低くさがっていくことを確認した(PL18・17)。D-III地区の作業終了後、D-I地区の表土削平を行なっていった。同地区的削平後D-II地区の表土削平へ移っていった。そして、D-I地区の表土層下の調査を一時休み、D-II地区の調査を続行する。同地区は、南北の長さ約24m、東西の巾約8mで、面積は190m<sup>2</sup>をはかる。同地区的表土層下、第二層の茶褐色粘土を削平した結果、同地区的南北軸中央から西側で淡黄色粘質土の地山に達した。なお、東側は第二層が堆積していることを確認した。したがって、深さは表層から50cmにとどめた。ま

た、同地区では、遺物・遺構の存在もなかった（PL13・17）。

同地区と併行して作業をすすめていたC地区も同様の結果であることをたしかめた。すなわち、南北の長さ12m、東西の巾約6mで、面積約48m<sup>2</sup>のC地区は、南北軸中央西側で、表土層下10cmの堆積土質下地山を呈し、東側ではこの茶褐色砂礫土の堆積は厚みをもち（PL13・17）、この堆積土中より須恵器の坏（PL19の20）を検出した。したがって、C地区では、東西軸南断面によって、同軸中央部から急激に地山が下がって、その崩上に礫石を含む土が堆積していることを確認し、深さ80cm前後にとどめた。

この地区調査後、表土削平作業を終了したD—I地区の調査へと移った。D—I地区は、地形状の制約から台形状の調査区域で、西側の南北の長さ42m、南側の東西の巾24mで、面積は約690m<sup>2</sup>をはかる（PL11・12・16）。同地区的調査は、第2次調査で検出した東西に走る溝状遺構および関連遺構にあった（PL12）。したがって、表土層下の第3層の茶褐色粘土を剥って、第3層の暗茶褐色砂質土表面上にある溝状遺構の南北の両肩を検出した。この検出とともに、第2次調査時に確認した暗茶褐色砂礫土の堆積する溝状遺構は、元来の溝の全貌を呈せず、この砂礫土の南北両側に淡黄色粘土が堆積していることを認めた。この確認後、さきの砂礫土を削除する作業を進め、溝内の状況確認につとめた。しかし、当初の推察に反して、砂礫土中からは、さきの発見にかかる須恵器との関連しうる遺物の検出はなく、江戸時代以降のものと思われる陶器、瓦の破片を検出したのみであった。

**A地区およびA—W地区** D各地区的調査後、弥生式土器が出土したA地区的調査に移った。A地区は、第2次調査時のA—Iトレンチを設定した地域である。同地区は、南北の長さ約56m、東西の巾約11mで、面積は約616m<sup>2</sup>をはかる（PL4・5・6）。

まず、同地区は、表土層の削平作業を始め、第2層の茶褐色粘土へ移っていき、その際に南北軸の中央から多数の弥生式土器の破片を検出した。この弥生式土器を検出した地点を中心に南北へ、また東西へ広げていった。これによつて、土器群は同地区中央部の西方にも伸び、設定地区範囲外の調査を余儀なくし、新しくA地区的中央部の西方にA—W地区を設けた（PL7・14・15）。A地区的第2層の削平によって、同層下は地山であることを確認し、また地山を穿った溝状遺構を、さきの土器群が集中して出土した地点で検



Fig 1

はやや湾曲し、北方部へ向った星を示していた。

一方、この溝の北方部でも、東西に走る溝状遺構を検出した。同溝内でも、さきの溝（以後、S溝と称す）内で出土した多数の土器に比して、数点にとどまるが弥生式土器片を検出した。（この溝をS溝に対してN溝と称す）N溝も同様に、A地区の西側から東側へ走り、中央部から東寄りの地点で消滅していたが、S溝が北方に湾曲していたのに対して、N溝はやや南方に湾曲していることを確認した。この遺構検出の成果によつて、さきに設定を余儀なくしたA-W地区の調査に移つていった。

A-W地区では、S・N溝の同地区での状況確認と遺物出土状態にあった。まず、S溝の周辺を、その後北進し、N溝の周辺部の調査を進めていった。S溝内で多数の土器群を検出し（PL10）、S溝はやや北方へ湾曲する地点で、後世の築造と考えられる石積遺構によつて消耗していることを確かめた。また、N溝でも、遺物の出土はほとんどなかったが、遺構はさきの南北に伸びる石積によつて切断されていた。しかし、N溝は、A-W地区では、すでに南方へ湾曲を呈していることを確認した。

一方、S・N溝は石積によつて切断されていたが、石積の西側でS溝と関連すると考えられる巾70cmの東西に走る小溝を検出したがこの小溝も、すでに後世にその東側は削られ、その削平した地域に

出した。さらに明らかになったことは、この溝内に土器群が集中して出土することであった（PL9）。溝は、A地区の中央部南方に位置し、同地区の西側より東側へ走り、地山が一段と低くなり、その上面に盛土（二次堆積）した所謂第2層の地点、つまり中央部からやや東寄りの地点で消滅していた。しかし、この消滅しを地点で溝

A地区の第2層の堆積土(二次堆積)が堆積していた(PL7)。したがって、小溝の元來の小溝の状況を示すものではないであろうといえる。

以上のA・A-W地区の遺構の検出につとめ、その後写真撮影を行ない、昭和47年3月31日に調査を終了した。

### 第Ⅲ章 遺構

今回の調査では、A・A-W地区とD-I地区で溝状遺構を検出したが、さきほども触れたごとくD-I地区は、第2次調査時の遺物=須恵器とは関連しない遺構であり、A・A-W地の溝状遺構が出土した多数の弥生式土器から、弥生時代の第3様式から第4様式の時期に位賦づけられることを確認した(PL6~11・14・15)。

#### A地区とA-W地区の溝状遺構

A地区的中央部に溝状遺構があり、S・Nの両溝がある。N溝の巾は1.2m前後をはかり、A地区とA-W地区の境で南方へ湾曲し、この地点が一番深く13cm前後である。A-W地区へ伸び、A地区的境界から西方1.3m前後の地点で消滅している。これは後世の石積築造によって切断されたためといえる。この溝は、地山を穿って築かれたもので暗茶褐色粘質土が堆積し、その直下に灰色粘質土が薄く堆2~3cmの厚さで堆積していたのである。A地区的中央部東寄りでは、高地開拓のため地山を若干削平し、その上面に盛上した、つまり同地区東側はやや地山が低くなっているため堆積土は厚く、すでにこの地点では溝は消滅していた。しかし、N溝の東側の消滅する部分は、やや南方へ湾曲を呈していた。したがって、N溝の現存する状況は、弥生時代のそのままの遺構状態を呈せず、かなり後世に削平されたものといえる。N溝内で出土した土器はほとんど最小の破片であったが、A-W地区的N溝で石積1点を検出した。

一方、S溝は、A地区ではさきのN溝と同様であり、ほとんど元来の状況をとどめないが、A地区的東寄りの地点ではN溝は北方へ湾曲を示していた。S溝の巾は、広いところで2.8mを、狭いところで1.5mをはかり、この溝内で数多くの弥生式土器が出土したほか、石包丁などを溝の中央部から東寄りで検出した。また、溝の西側は、もっとも巾が広くなり、A-W地区へと伸びていく。そしてもっとも巾が広くなり次第に巾を縮めていく、A-W地区の中央部の地点では、溝の巾は1m前後となり、この地点でS溝は、さきの石積によって切断されているのである。A-W地区でも数多くの土

器を検出したほか、石器、石片も若干出土した。しかし、A・A-W地区ともにS溝の深さは、N溝に比べて深く、20~25cmをはかる。これらのN・S溝は、石積によつて西側は切断されていたが、N・S溝の出土状況から考えて、周溝を呈する一連の溝状遺構と考えられる。一方、石積の東側で、西北部へ伸びる小溝がある。

小溝の巾は、石積の地点で70cm、A-W地区の西側面の地点（同地区の北側から2.5m南方地点）で85cmをはかり、この地点から北方では、さきにも述べたごとく、小溝の北肩は削られていた。この小溝の深さは10cm内外をはかり、あまり深い溝ではない。また、同溝内でも若干の弥生式土器を検出した。

#### A-W地区の 石積遺構

弥生時代の溝状遺構を剥って、築造した南北に伸びる石積遺構は、現在の島地地区割りと一致し、この島地開墾の際に、弥生の溝状遺構が破壊されたと考えられ、石積の石の間で検出した屋瓦片がこれを語る。石積の長さは、調査地区内で8.8mをはかるが、南・北に伸び、その全長はつかめない。巾は20~30cmであり、石積の石は一段乃至二段の組合せで現存する。

#### D-I地区の 溝状遺構

D各地区的調査の中心となったD-I地区の溝状遺構は、D-I地区全域の東西方向に走り、全長は18.5mをはかり、D-I地区内にとどまる遺構である。また、元來の溝の巾は2.6mで、第2次調査時に検出した暗茶褐色砂質土が堆積していた溝状のものは、その両肩に淡黄色粘土が堆積し、物理的要因などによつて中央部に集まつたといえよう。溝内には礫石などがあり、遺物としては後世（江戸時代以降と考えてさしつかえない）遺物があり、さきほど述べたが、須恵器との関係は考えられない。

## 第IV章 遺 物

今回の本追跡調査では、土器を中心とする遺物の出土が若干（コンテナパットに約6箱）ある。すでに述べたごとく、本追跡のA地区、A-W地区は弥生式土器を主とし、D地区、C地区では須恵器を主とするものであり、D・C地区での遺物は、二次堆積層中の出土にかかり、資料としては充分なものとはいえない。しかし、A・A-W地区の遺物は、溝状遺構との関連を充分語ってくれる資料といえる。ただ、遺構内の遺物の保存状況が悪く、そして、遺物の出土状況が、溝内に捨てられたと考えられる状態を呈していて、豊富な資料として十二分に成立しない点が短所といわねばならない。

**弥生式土器** A・A-W地区の出土にかかるもので、ほとんどがS溝内出土の土器で、若干の第三様式の土器を除けば、ほとんどが第四様式の土器である。



Fig 2

**第三様式土器** 器形は不明であるが、土器の胎土が明褐色を呈し、やや微粒の石が混入する。また、文様帶は、二条の縦状文である(Fig 2)。

ごく短く直口した口縁部をもち、やや外反しがみであり、口縁部外面に三条の沈線を施し、胎土は淡褐色を呈した壺形土器である(PL18の1)。

**第四様式土器** 頸部が外反し、口縁端部を括げて口縁端面を作り、そこに条の沈線を施した後、円形浮文を作った壺形土器である(PL18の4)。やや長く口縁端面を作り、その面に何条かの凹線を施したもので、頸部が外反し、口縁端面が外にやや反したもので、胎土が茶褐色を呈し若干細微粒の小石を含むもので、口縁端面の口縁にクシ目による扇形と思われる文様を施したものがある(PL18の4・8)。口縁部が外反して、口縁端部がまたやや内反したもので内反するところに凹線を施し、口縁部下部に二条の凹線をなした壺形土器である(PL19の4)。

**その他の土器** 高坏・把手 坏部はすでに欠失し脚部のみが残存し、器形に大小ある(PL19の13・15・16)。また、器形が壺形であるのか不明で、把手が付けられていたものがある(PL19の12)。

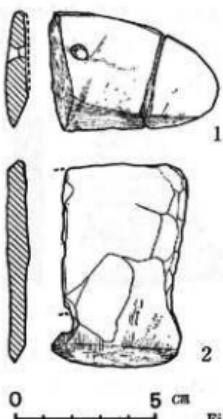
**須 惠 器** 蓋・坏 D各地区で出土したもので坏の蓋で宝珠形のつまみを付けたものと、その坏の器形からつまみが欠失して不明だが宝珠形のつまみと考えられるものがある(PL19の17・18)。また、坏では短い脚を施したものと平底を呈するものがある(PL19の19~22)。

#### 石 器



Fig 3

**石包丁** 石器は、石包丁と石包丁様のものがA地区で出土した。石包丁は半欠し、片刃で磨痕が肉眼でわかるもので、石材は緑泥巖である。また、同じ石材を使用しながら石包丁様のものと思われるが、穿穴がなく、片刃



投弾形土製品

0 5 cm

Fig 4

である。刃部をもつ面の反対面は剥離面を残したものである（Fig 4 の 1・2）。

**石槍・石鎌** 石包丁の他に石槍と石鎌が各 1 点づつ出土し、石槍は尖頭部の基部が欠失し、石鎌は完形の柳葉形を呈するもので、一面の剥離は丁寧になされながら、他面は剥離は荒く、フレークされた面を残している（Fig 3 の 1・2）。

直徑 6 cm 前後の土製の錐形のもので、現存する部分に直徑 5 mm の穴が穿たれているが、7 mm までにとどまり、つきぬけていない。胎土はやや軟質の茶褐色の粘土をもちいてつくられたものである（Fig 4）。

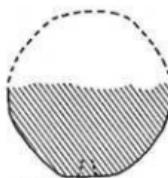


Fig 5

0 5 cm

#### 参考文献

1. 杉原莊介・小林行雄編『弥生式土器集成・資料編Ⅱ』
2. 末永雅夫・小林行雄・藤間謙二郎『大和府古弥生式遺跡の研究』
3. 田中幸夫「投弾形土製品について」（『考古学』第 7 卷第 10 号収）

#### 第 V 章 ま と め

今回の調査によつて、D—I 地区の溝状造構は、前回の試掘調査で出土した遺物と関連するものではなく、むしろ後世の遺物が出土し須恵器の示す時期である平安時代に築造されたものでないことが明

らかになった。また、同地区の溝状造構の暗茶褐色砂質土は、溝の元の巾を示すものではなく、その両肩に淡黄色粘質土が堆積し、この淡黄色粘質土の堆積によって、暗茶褐色砂質土が中央部へ物理的原因で集中したものと考えられ、元の溝の巾は約3.2mであったことを確認した。

一方、A・A-W地区の溝状造構は、出土状態から考えるかぎりS・N溝は一連の造構であり、周溝を呈するものであったと考えられる。そして、この周溝の西側の一地点で、この周溝と連結した小溝が西北部へ伸びていくものである。さらに、このS・N溝の南北の範囲は、8~10mをはかり、元来は周溝墓としての機能をもつたものであろうと考えられる。この周溝墓の本来の機能が、後世の墓地開墾事業によって消滅し、単に溝のみが残ったものといえるようである。

この本来の周溝墓としての機能を考えるなら、この周溝墓の築造期は弥生式時代の第三様式~第四様式の時期である。農耕文化が定着していた時期ではあったが、投弾形土製品、石槍、石鎌の出土、地形的環境などから狩猟活動も行なわれていたものと考えられる。また、周溝墓と考えると、泉北・堺など泉南地域周辺で検出されているが、泉南地域では初めてとなる。このA・A-W地区の溝状造構を、その検出状態および地形的立地条件から考えると、周溝墓と考えられないことはなく、それに伴なう集落を、溝状造構と一丘神社までの範囲に存在したのではないかと考えられるが、早断しかねるところである。

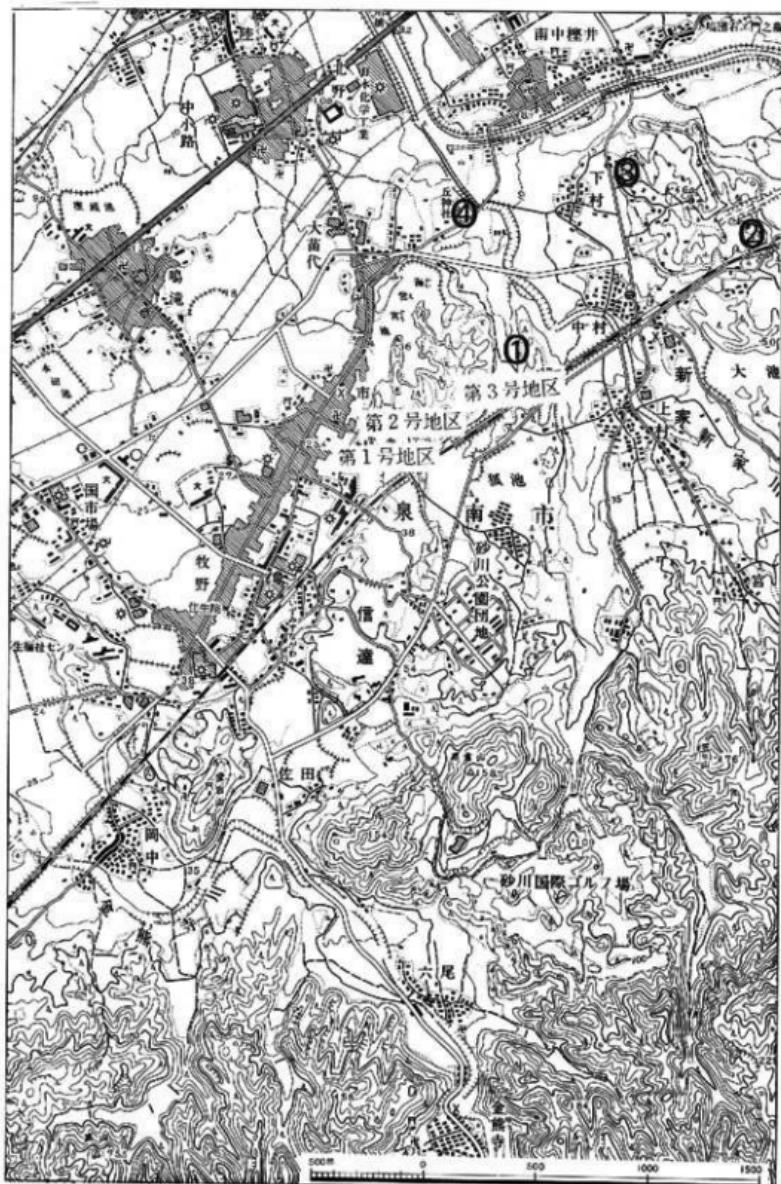
註 ①土製投弾の出土例は、現在まで数例しかないが、福岡県立岩遺跡、奈良県府古遺跡で出土している。いずれも弥生式時代前期のものである。なお本例と時期的に近いものとして東大阪市山畠遺跡上製投弾の例がある。

(補註) 參考文献

1. 小野忠熙『瀬戸内地域における弥生式高地性集落とその機能』  
(『考古学研究』第6巻第2号所収)
2. 許闇町文化財保護委員会『柴雲出一番川県三姓群証明町柴雲出山弥生式遺跡の研究』
3. 中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調査会『瓜生堂遺跡』  
同調査会『西岩田遺跡』

4. 水野正好『古墳発生の論理』（『考古学研究』第13巻第4号所収）
5. 金井塙良一『関東地方の方形周溝墓』（『考古学研究』第13巻第4号所収）
6. 第2阪和国道内遺跡調査会『池上・四ツ池・1970』
7. 枚岡市教育委員会編「枚岡市史・史料編1」

PL. I 向井山遺跡位置図



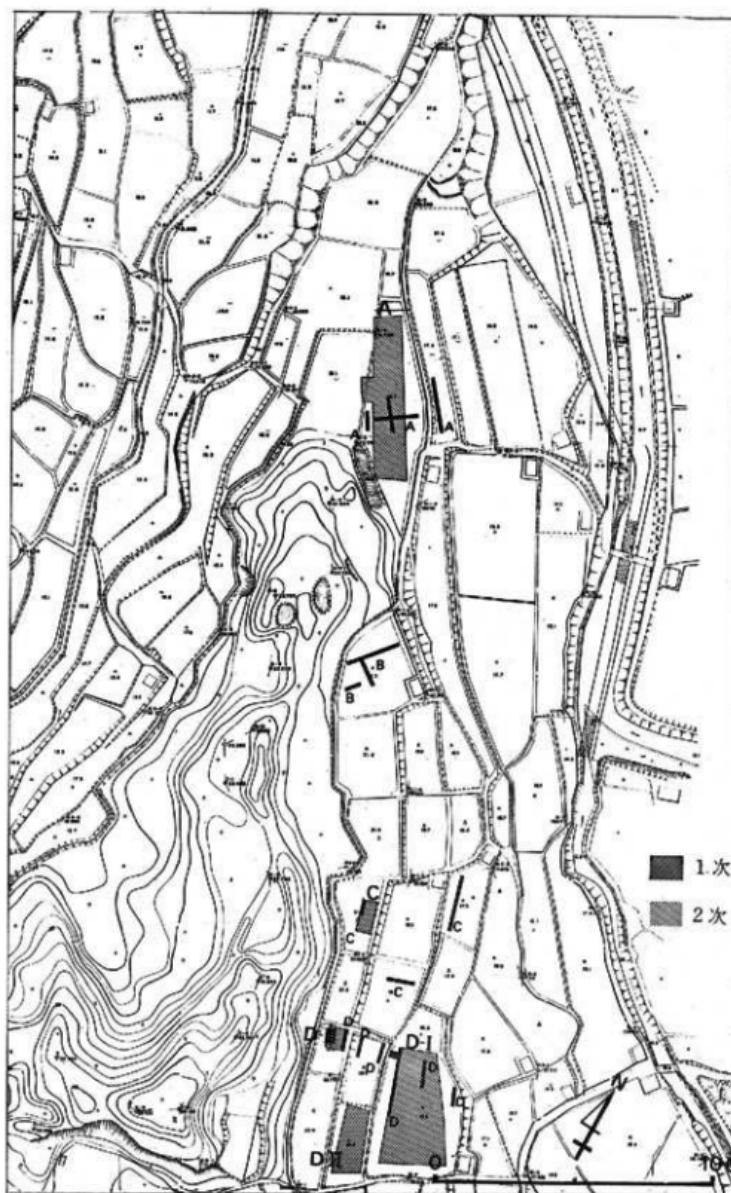
1 向井山遺跡

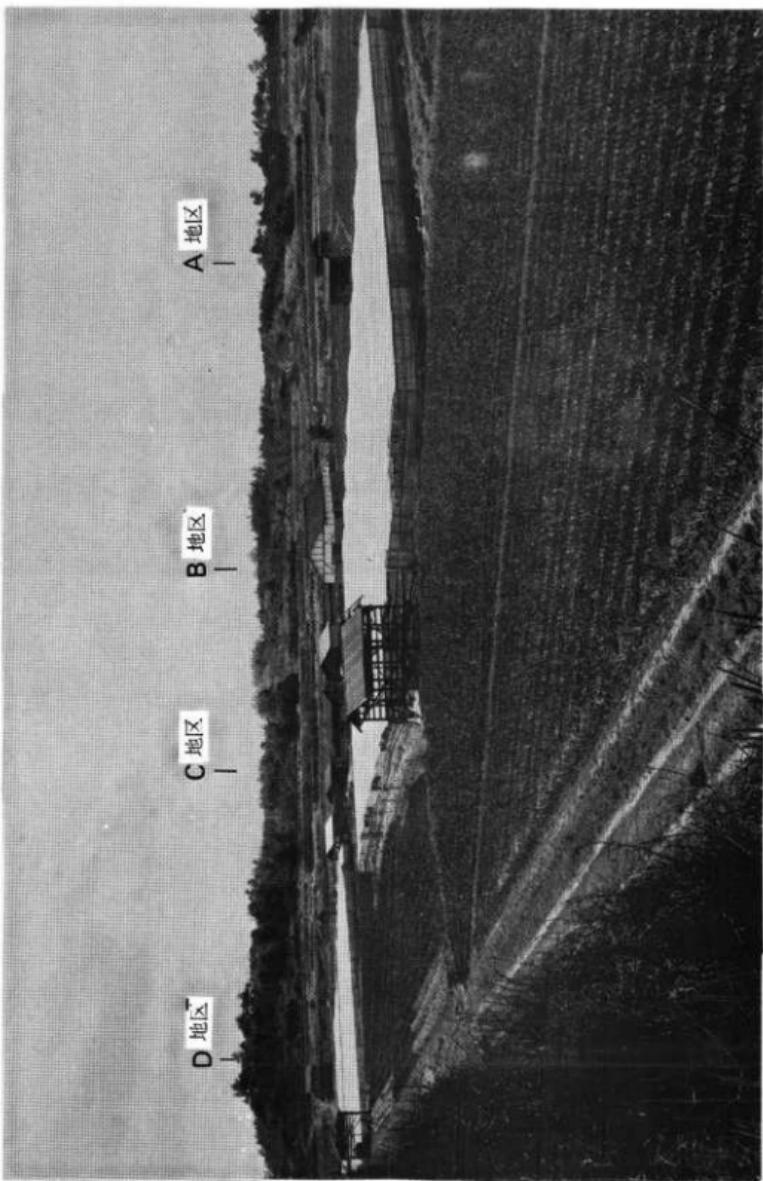
2 新家古墳群

3 下村古墳

4 海会寺跡

PL. 2 向井山遺跡調査位置



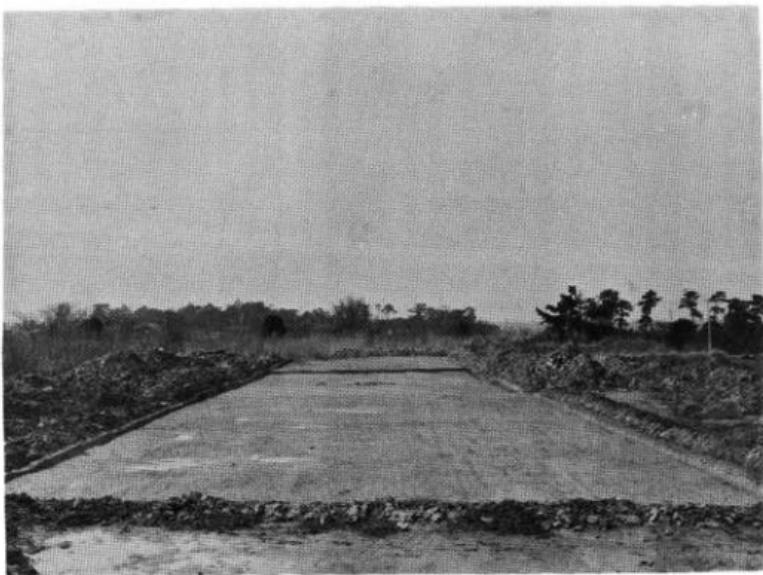


PL. 4 A 地区・D 地区遠望



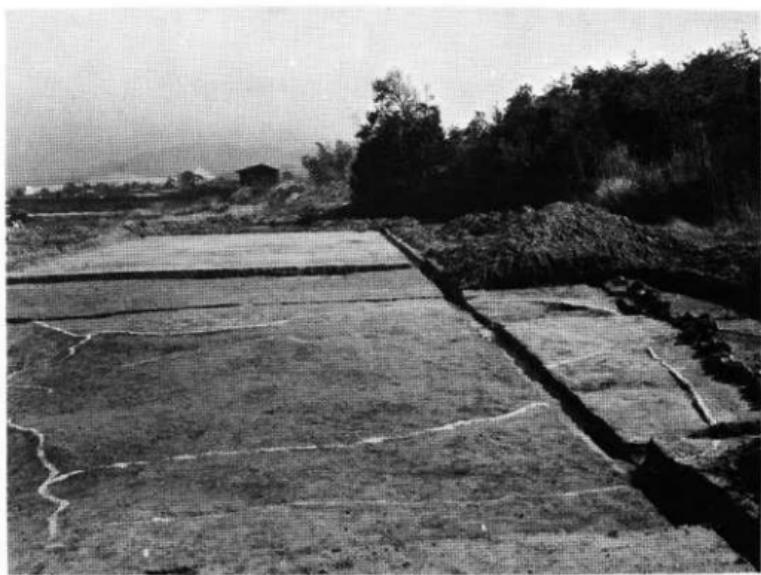
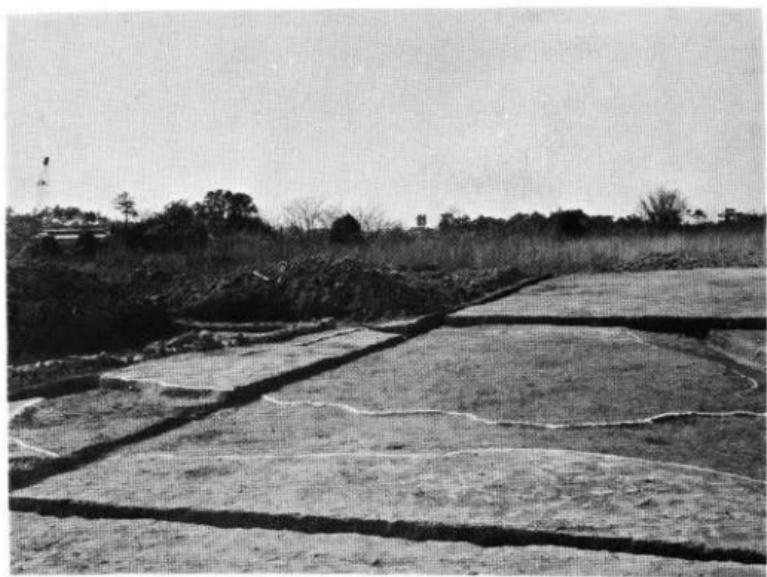
(上)A 地区 (下)D 地区

PL. 5 A 地区調査地域全量



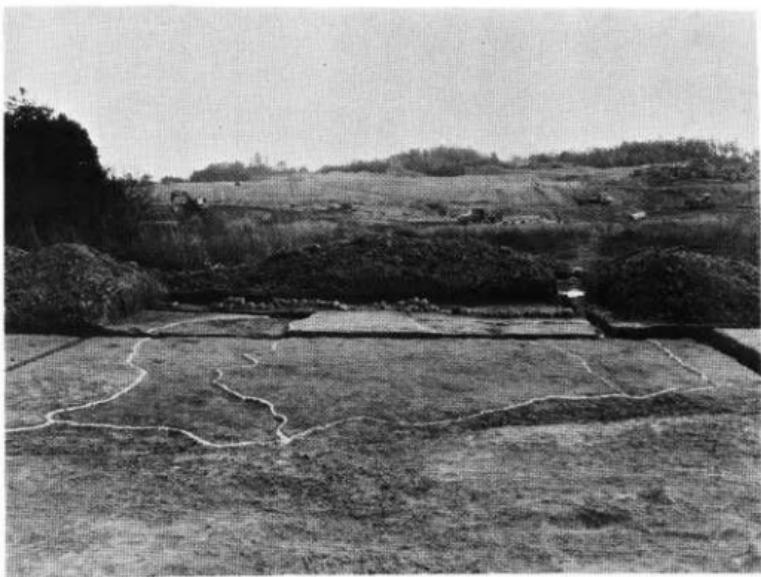
(上)北方部 (下)南方部

PL. 6 A 地区溝状遺構遠望



(上)北方部 (下)南方部

PL. 7 A 地区溝状遺構遠望



(上)西方部 (下)東方部

PL. 8 A 地区溝状遺構状况



(上)出土状況全景 (下)東方部

PL. 9 A 地区の遺物出土状況

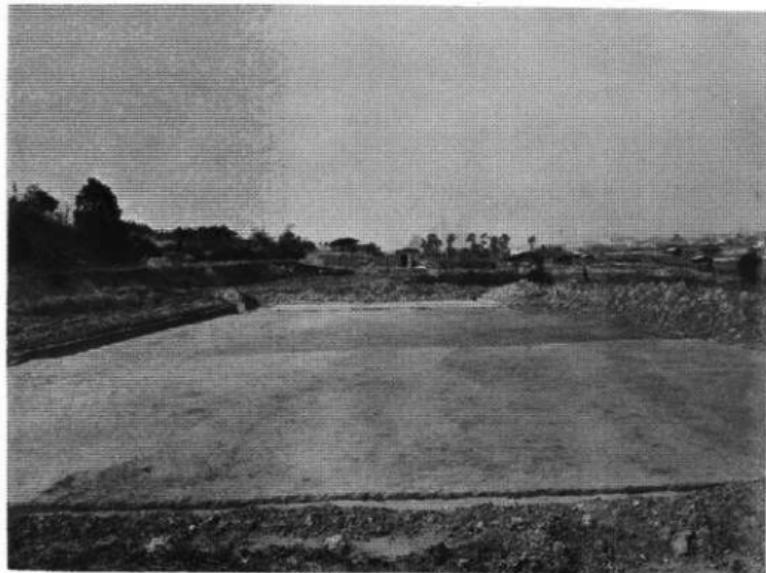
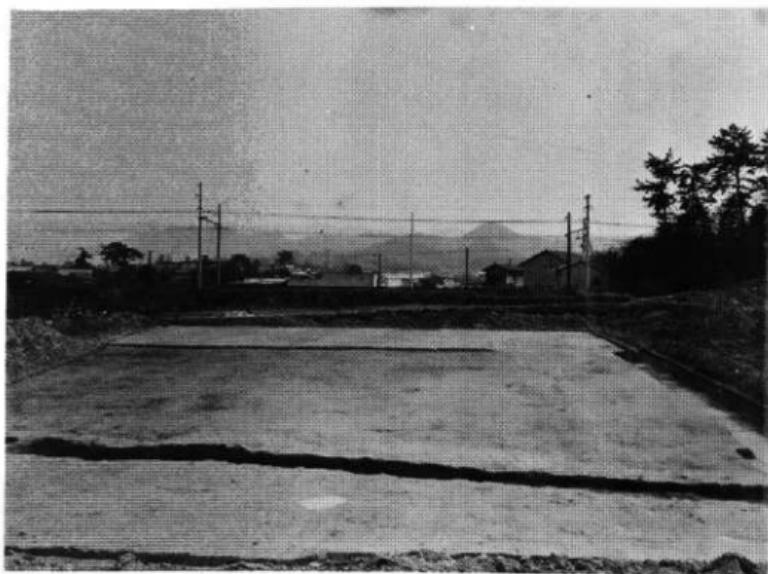


PL. IO A-W地区の遺物出土状況



(上)南方の溝 (下)北方の溝

PL. II D—I 地区調査地域全景



(上) 南方部 (下) 北方部



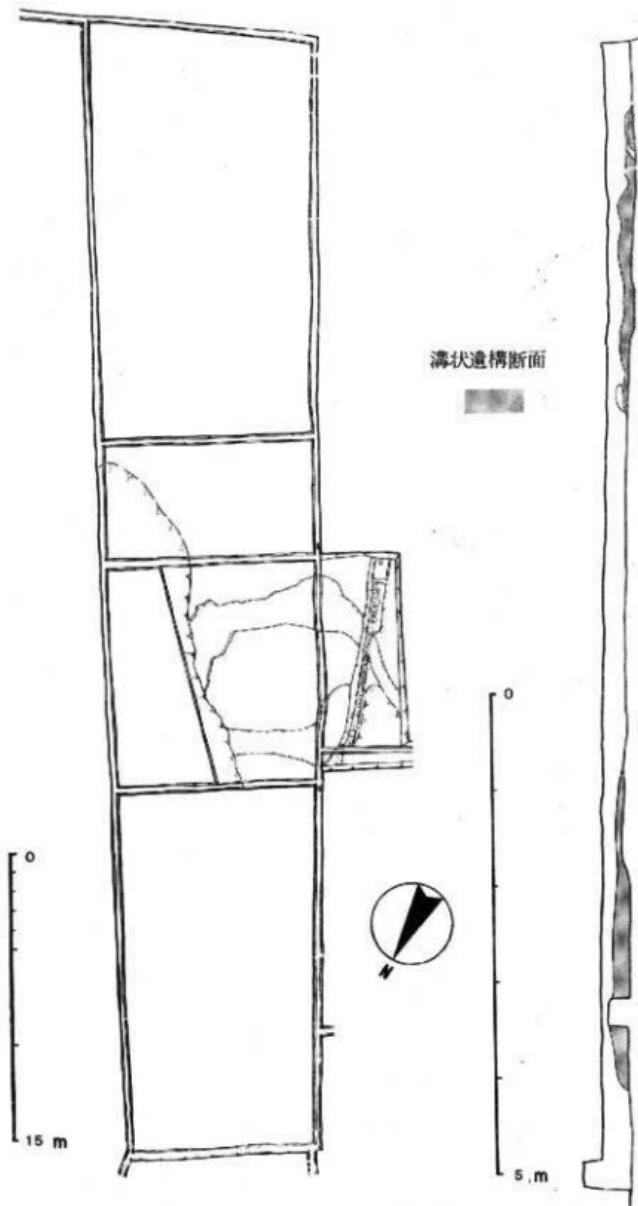
上 東方部を臨む

下 西方部を臨む

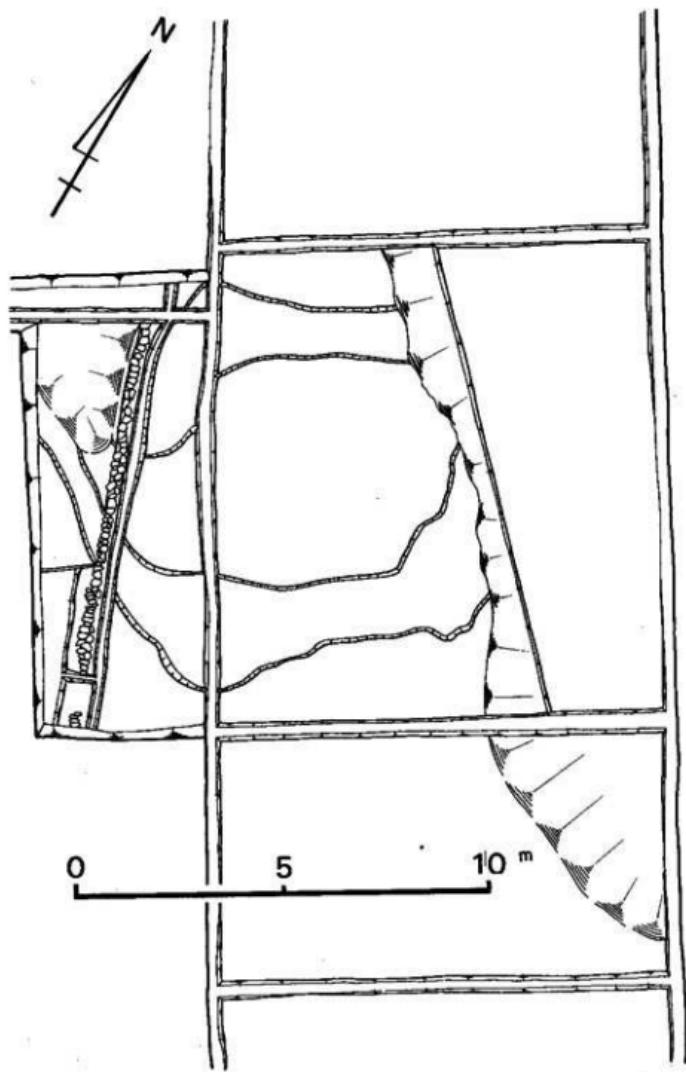


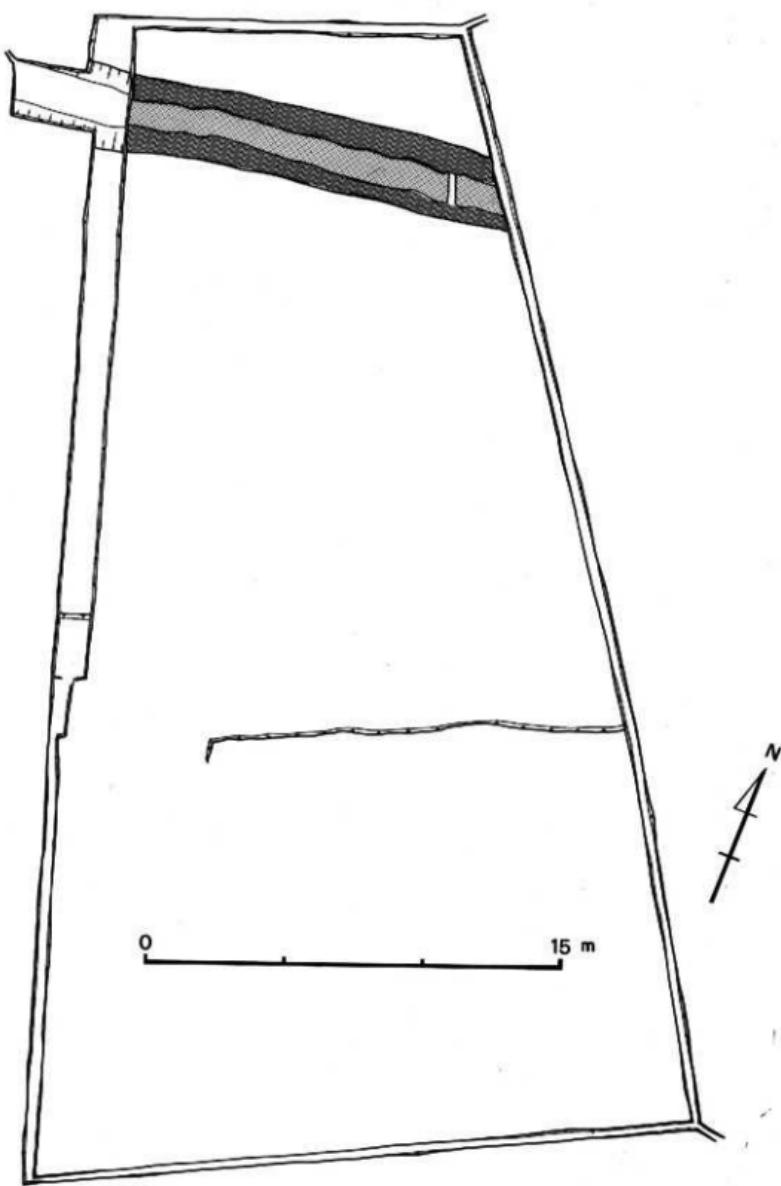
(上)D-II地区 (中)D-III地区 (下)C地区

PL. 14 A-A-W地区平面図・断面図

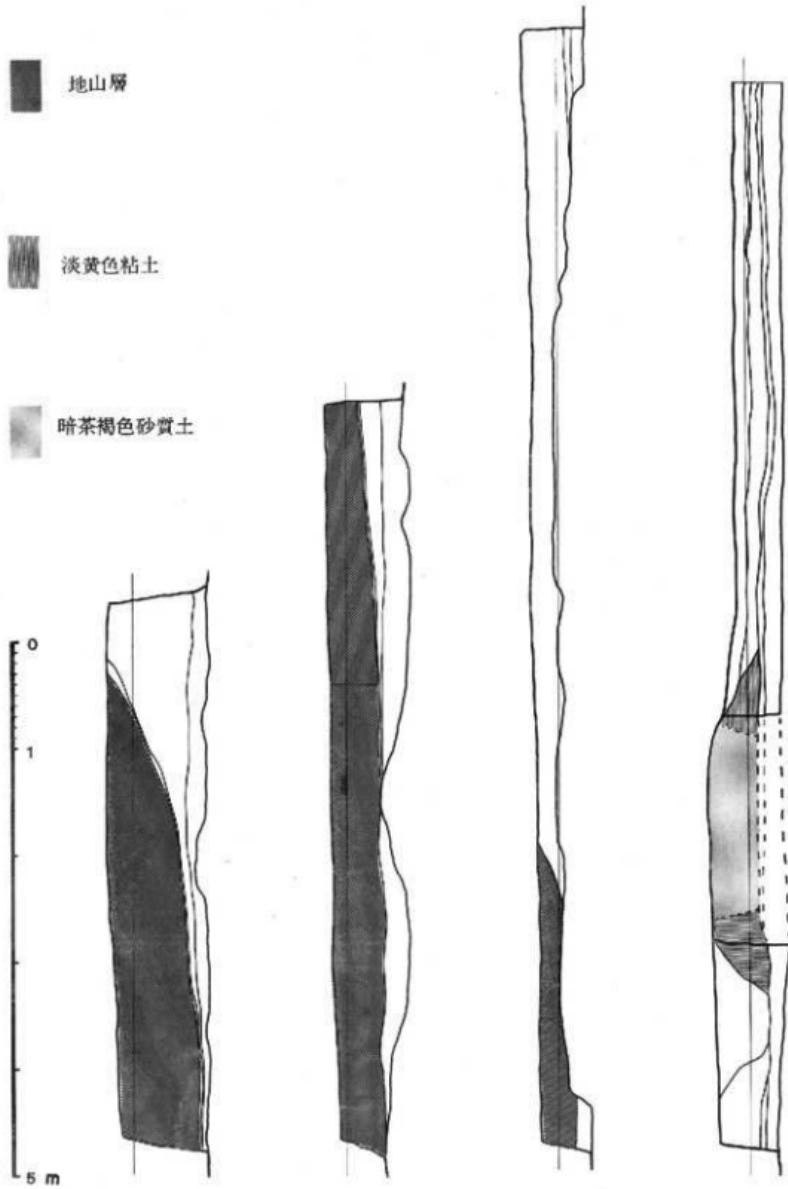


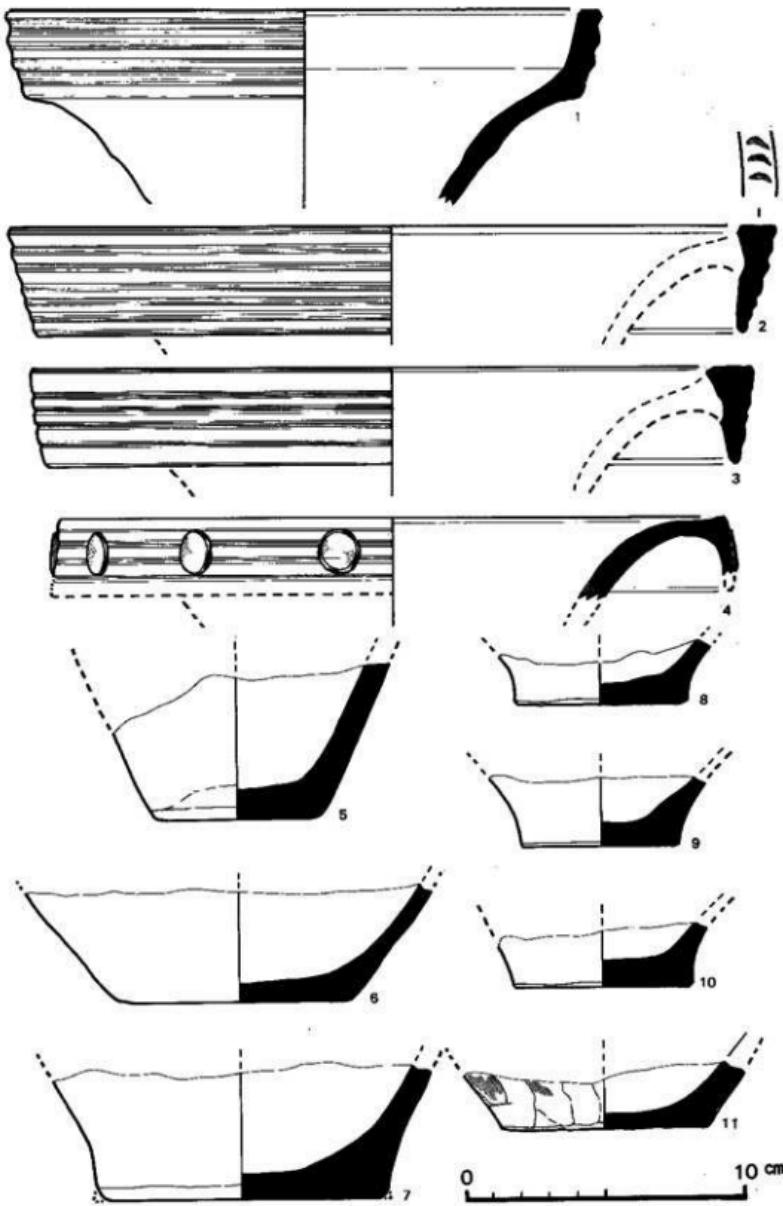
PL. 15 A-A-W地区溝状遺構部分平面図

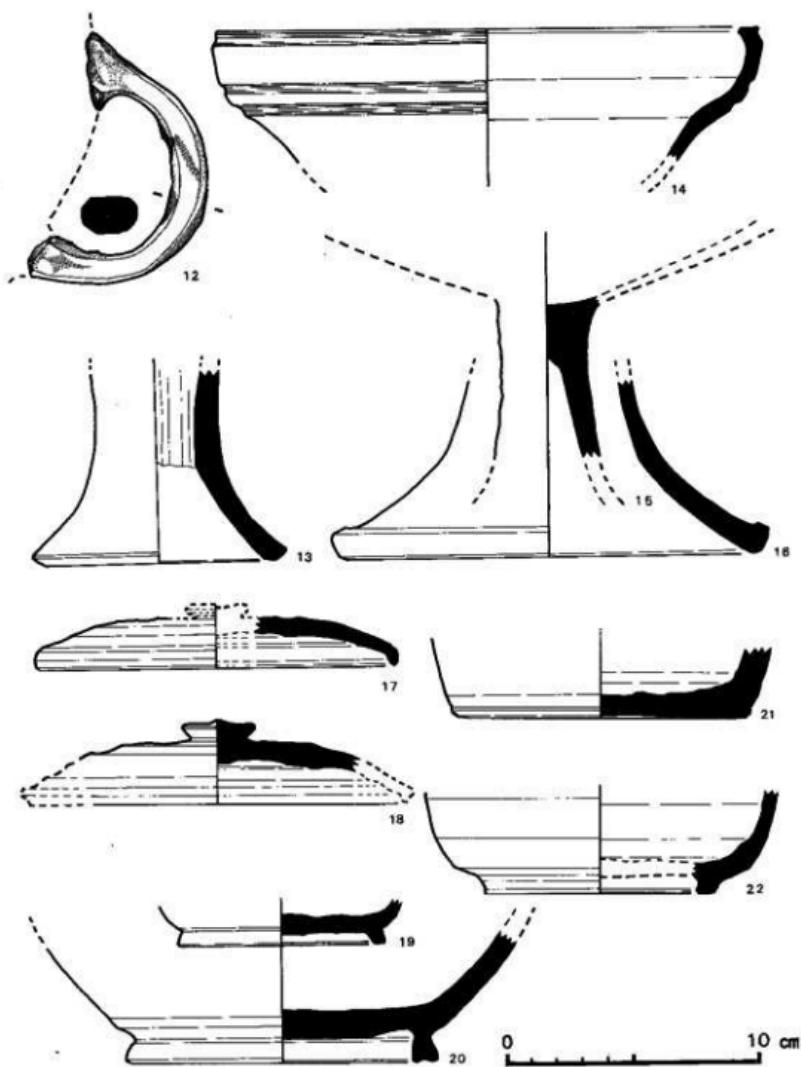




PL. I7 D地区D—I、D—II、D—III地区南断面图







泉南市向井山遺跡調査報告

発行者 泉南市教育委員会

著 者 奥野 義雄

発行日 昭和47年3月31日

印刷所 株式会社 誠文社

(718) 3061代

